

保育計画成果報告書

法人名	学校法人近江兄弟社学園
施設名	認定こども園 近江兄弟社ひかり園
報告者（役職）	安川 千穂（ 園長 ）
住所・連絡先	滋賀県近江八幡市多賀町 557
	☎ 0748-32-0301
	E-mail yasukawa0043@vories.ac.jp

○タイトル（保育計画）

ツリーハウスを軸にした異年齢交流（ごっこ遊びを中心に）

○主な助成備品

ツリーハウス

1. 実施した保育計画策定の目的

一 こども園園庭に設置している遊具は既成の物が中心であり、設置の目的としては、主に「子どもたちの体づくり」「チャレンジ精神を育む」ことであった。この度設置したツリーハウスは、屋外での「ごっこ遊び」の拠点となるようねらいを持ち設置した。これまでも、園庭の至る所（砂場、木かげ、ままごとハウス等）で、一人、また友だちと一緒に様々な遊びを展開させる子ども達の姿があった。園舎ほどの高さがある大きな木に添って建っているツリーハウスにて、子どもが持つ豊かな感性がどのように活かされていくのかを見守りつつ、子ども達の意欲が増すような（時には意図的に）環境作りの必要を感じる。

二 認定こども園開設2年目を迎え、幅広い年齢の子ども達が生活する中での配慮や、行事の持ち方について検討し実践することが増えつつある。しかし、子ども達が自発的（主体的）に関わり合うきっかけ（仕組み）は薄く、課題のひとつでもあった。乳児棟、幼児棟という2棟の園舎に分かれ園生活を送ることも希薄な関わりの原因であるように感じる。ツリーハウスは2棟を繋ぐ裏庭に設置しているため、集しやすい雰囲気がある。そこを拠点に自然な流れの中で、異年齢で交わり愛情関係や受容性、向社会性を育みたいと願った。

2. 具体的な実施内容

ツリーハウスオープン：4月

取り組み：クラスごとにツリーハウスに登り、気づいたこと、感じたことを表現し合う。

◎登ってどんな気持ちがあったかな？

◎どんなことがしたい？

◎危ない！と感じたことはなかった？



・ 昨年の1月、ツリーハウスが建つ様子を眺めながら「いつ出来るの？」と完成を待ち遠しく思う子ども達であった。暖かな春になり、眺めて、触って、登って、見下ろして、「先生、今日も木のお家に行ってもいい？」憧れのツリーハウスは子ども達にとって「身近な場所」となった。園舎2階の高さと同じ位置となるツリーハウスの上段に登った子ども達はそれまで見ることがなかった「新しい風景」に目を輝かせていた。「あ〜気持ちいい」「(園庭の築山を指差して)あっちの山が小さく見えるなあ」めいめい感じたことを話す姿がみられた。



- ・ 「何して遊ぼうか？」という投げかけに「そりゃあ、レストランやん」「ホテルもいいなあ」「僕の家にするわ〜」イメージの前提には共通して「ごっこ遊び」があった。
- ・ 「楽しいけどちょっと怖いと思うことはあった？」「ない、ない」「でも、落ちたら痛そう、ジャンプとかはしたらあかんで」「階段ちょっと怖かった」子ども達なりに危険を予知し、どうすれば安全に遊べるかを話し合うことができた。
- ・ 後日、ツリーハウスの階段で、年長組の子ども達が小さい組さんに声をかける姿がみられた。「あんな、忍者みたいに登っていくねんで、そっとゆっくりな」「降りるときは、おしり外に向けるんやで」「降りる人が先〜、(登るの)まだ待ってて〜!!」
- ・ 子ども達のお気に入りには頂上のスペース。天井のないツリーハウスの屋根は緑色の葉っぱ。ハンモックを吊り、新緑の間からみえる青空を「空のおふとん!!」と呼んで遊ぶ子どもの姿がみられた。

摘み草レストランごっこ：5月〜

取り組み：ツリーハウス周辺に机や椅子、ごっこ遊びの道具を整え、子どもたちが主体的に選びツリーハウスに持ち込めるようにする。外遊びの時間を長く設定し、十分に遊びこめるように保育計画をたてた。また、異年齢での出会いが広がるように外遊びの時間が重なり合うよう意識をした。

◎○○ごっこを楽しもう。

◎何しているのかな？私もしたいな。

◎明日も続きをしたいね。

- ・ ツリーハウスの中に皿やコップなど、ままごと道具を持ち込み、年長組さんをご馳走作りを始めた。ハウスの外でその姿をじっと見ていた年中組さんにお姉さんたちが声をかける。「まだ準備中、また後で来てな」「うん」お天気のいい日、毎日オープンする摘み草レストランであった。



- ・ 年長組さんの遊びを模倣するように、年中組さんだけでごっこ遊びをする日もあった。年長組の子ども達のように、細やかに役割分担をする姿はなかったが、具体的なイメージを、「年長児の観察」により共通してもつことが出来ていたように感じる。

- ・ 2歳児クラス子ども達がお客さんになったり、時には異年齢児でごっこ遊びを楽しむ姿もみられるようになった。

宝島へ出発（お泊まり会）：7月

取り組み：年長組お泊まり会のテーマがツリーハウスにつながる。

◎ツリーハウスが船に変身！！

- ・ 梅雨が明け、夏の保育が始まった。年長組子ども達は毎年この時期、園にてお泊まり保育を経験する。今年のお泊まり保育のテーマは「冒険」。帆を張った船に乗り、夏の風に導かれ宝島へ冒険にでかけ、素敵な宝物を見つけに出かけるというものであった。
- ・ 取り組みの初めに、「船はどうする？みんなで作る？」という保育者の投げかけに子ども達が口にしたひとは「もうあるやん、ほらあそこに！！」指差した先にはツリーハウスが。2階の保育室から色とりどりの帆を張り、園舎とツリーハウスがひとつとなって子ども達の冒険心を宝島へと運んでくれた取り組みであった。



その他の取り組み

○絵本「三匹のこぶた」をツリーハウスでイメージし、表現遊びを楽しむ、等。

3. その成果と評価

屋外における子ども達の「ごっこ遊び」は、開放的で次々と豊かなイメージが湧き上がってくる姿がみられた。ツリーハウスという空間は、新鮮で「特別な居場所」となり、そこで遊びこむことが、子ども達の心身の安定や成長につながることを傍で見て感じていた。異年齢の交流の拠点にという目的は、自然なかたちで実りつつある一年となった。年上の子どもの中には思いやりや優しさが芽生え、年下の子ども達は「楽しそうだな、やってみたいな」という憧れが芽生えたように感じる。

4. 今後の課題と展望

子ども達の遊びをどのように大人が捉えるのかにより、その遊びの広がりが変わるように感じる。幼児期の学びは「遊び」であるという所以は、その中のねらいや目的が教育的意義に富み、主体性を持ち得ようとする自然発生的な子ども達の遊びが、豊かに広がるような環境作りを保育者が心がけると同時に、子ども達の遊びを十分に観察し、大人もそのイメージを共有する必要がある。子ども同士のやりとりの中で、子ども達の育ちを感じ、様々な年齢幅で遊べるような道具やスペースの見直しを定期的実施したい。子ども達の活動（姿）を職員間で共通認識し、出会いを繋げ、育ちを支え合うこども園の運営に努めたい。

以上